

古くても乗りたいアーマ!

TEXT & PHOTO Akio Lorenzo OYA

そのオーラ、天下無敵

イタリアから1年ぶりで東京都心にやって来て、思わずたまげた自動車風景がある。「長尺モノ」、つまり全長が長いクルマの多さである。

六本木界隈ではマイバッハ62を一晩のうちには2台目撃した。日本における長尺モノのトラッドであるリンカーン・タウンカー改・巨大リムジンも数が増えている。渋谷ではハマーのストレッチ仕様走り回っていた。

もちろんこの中には個人所有ではなく、パーティーやイベントのチャーター用も含まれるだろう。

しかし、軽自動車しか売れないご時勢に、なんともコントラストの強い現象である。同時に、自動車雑誌では（マイバッハを除き）絶対採り上げられない種類のクルマが、ムーブメントになっているのは痛快でもある。

いっぽうイタリアやフランスの場合、「長尺モノ」を日頃見る機会は少ない。なにしろ結婚式の送迎で、ジャガーXタイプをレンタカーで借りてきただけで、ご近所から「スゲーッ!」と声上がるくらいなのである。ちなみに結婚式では、古いクルマを所有する友人に頼み、花飾りを付けてセレモニーカーに急造するカップルもいる。ボクの知り合いのフランス人が結婚するときは、シトロエンのトラクシオン・アヴァンだった。

もちろん、しかるべき街には「長尺モノ」が徘徊している。その最たる場所がパリやモンテカルロだ。

そうした街の人は、どんなストレッチが現れようと驚かない。いわば「リムジン抗体」が備わっている。

高級温泉保養地として名高いドイツのバーデン・バーデンも、そうした「リムジン抗体」都市のひとつだ。

ところがどうだ。公園脇に佇む1台のクルマに、散歩中の誰もが振り向いているではないか。

メルセデスにおける伝説の最高級車、600である。

そのクルマからは周囲を支配する空気が漂っている。

600といえば、1991年に先々代のSクラス・W140が登場してV12に同じ600の名が冠せられたとき、「元祖」の再来か?と騒がれた。同様の声はマイバッハ登場のときも上がった。だがいずれのクルマが駐車していても、気にとめる一般人は少ない。マイバッハ62など、600より60cmも長いにもかかわらず、である。

威圧感でいまだ超えるクルマが現れない元祖600というクルマはメルセデス史上、いや戦

後自動車史上、類稀なクルマの1台であろう。

ふと思い出したのは、前ローマ法王ヨハネ・パウロ2世である。在任中、法王庁には前述のW140が納入されたほか、さらに聖年である2000年にはフィアットからランチア・テージスをベースにした特製リムジンも寄贈された。しかし、法王は最後まで古い600を移動に活用した。またこの秋、例の「同志・首領様」も、隣国の大統領の送迎に生産終了後26年を超えた600を使っていた。

惜しいのは、どちらも600をわざわざ使い続けていた（いる）理由を聞けないことである。やはり、そのクルマの発するオーラを計算してのことか。実はご本人が意外にカーエンスージアストだったら、それはそれで面白いのだが……。



メルセデス600は、1963年にデビュー。V型8気筒エンジンは6332cc 250HP。1981年までに生産された台数は約2500とも2600台ともいわれる。写真の5.5m仕様のほか、さらなるロングバージョン「ブルマン」もあった。バーデン・バーデンにて。